

政策評価制度の現状と課題について (昨年 12 月 27 日の政策評価分科会の主な指摘)

(全般的な指摘)

- 「評価のための評価」と言われる面があれば、その原因を考え、見直すべき。

(証拠やデータに基づく政策の判断・分析に寄与しているか)

- 政策評価でうたわれていたのは、証拠やデータに基づいた政策の作成、判断を行う文化を創り上げること。
- 各府省の政策評価の中で、定量的な手法を使った分析がほとんど行われていない。データを使った分析結果を出してほしい。
- 予想されなかった方面への波及効果というのを誰が見るのか。そうした副作用に対しても政策評価は必要。
- 政治家から見て、全体の政策、国家予算に対して、どう考えれば良いのかという根拠や相談相手になるようなものがない。国家戦略室や総務省などがそうした機能を持てばよいのではないか。
- 評価の途中で出てきた新たな問題やさらに良い目標などを官僚自らが発見して政治家にフィードバックしていくことが、本来やるべきことの 1 つ。

(目標管理方式を用いた評価について、目標・指標の立て方に課題)

- 3 E (Economy、Efficiency、Effectiveness) の観点での目標設定については、試行錯誤を経て進めていくべきとされていたが、行政評価局が範を示すといった話も含め、あまり進展がなかったのではないか。
- 目標自身が良くない場合でも金科玉条のように達成しないといけないとすることがよいのか。

(各府省における政策の恒常的・継続的な見直し・改善に役立っているのか)

- 政策評価は、行政改革を日常的に行うための仕掛けとして期待されてきたが、それにはかなりの知恵が必要である。一定の圧力を絶えずかけていく方策を確保する必要があり、他方、現場の負担感を取り払って効率的に見直しをする制度を作る点に関しては、知恵を働かせるべき。
- 今の評価は外向けのもので、自分たちが仕事を見直すためのものになっていない。
- 優先順位付けをきちんとするのが内部では大事で、仕事を切るときの理論付けにもなる。自分たちが普段行っている仕事に政策評価を組み込んでいくものがないと続かない。

(総務省が行う評価の改善)

- 行政評価局は監察の経験から、きちっとしたデータを取る文化ははぐくまれていると思うが、それをどういう形で分析し情報として組み立てるのかという分析能力を高め、よりよい情報を産出し、よりよい見直しにつなげていただきたい。

(その他)

- 外部の人も、各省庁や刷新会議からもアクセスできるデータベースを作ってほしい。元データが見られ、自分で加工できなければ新しい評価の視点は出てこない。
- 政策評価によってありのままの事実を整理し、今後の方向性について国民が共有して透明な議論ができるようにすることが、政策への国民の不満解消に資する。
- 組織を運営する立場からすると、どの程度時間をかけずに簡単に使えるか、どうやってモチベーションを与えることができるのかが非常に重要になるため、評価の手法を深めるとともに簡便さも追求すべき。
- 性善説的に削減努力をきちんと評価することが大事。
- 予算の決定や執行に関する時間軸が整理されていない。